

京都大学

生態学研究センター・ニュース

No. 23

—目次—

京大生態学研究センター運営委員会..... 1 （第九回）議事要旨	Eugene Kornel Balon教授の来日を終えて..... 6
京大生態学研究センター協議員会..... 2 （第十五回）議事要旨	生態学研究センターの共同研究一覧..... 6
京大生態学研究センター協力研究員リスト..... 2	陸水生物の標本データベースの作成..... 7
1994年度（平成6年度）京大生態学研究センター..... 2 前期公開実習・公開セミナー募集要項	TREE誌9巻79-80にご注目を！..... 7
センター教官（教授1・助教授1）の公募..... 4	生態研セミナーの報告..... 8
センターを去るにあたって..... 5	1993年センタースタッフの行った講演活動一覧..... 10
	編集後記..... 11
	今後のスケジュール..... 12

京大生態学研究センター
運営委員会（第九回）議事要旨

日時：1994年5月23日（月）
場所：京大会館
出席者：運営委員19名、幹事1名

議事に先立ち、4月1日付人事異動に伴う後任幹事として片山総務掛長を紹介。

議題：

1. 平成7年度概算要求について
平成7年度概算要求案が、国際共同研究経費、研究部門増、特別設備要求等について質疑がなされたのち、承認された。
2. 教官人事について
 - A. 温帯生態研究部門教授人事
人事選考委員会の石田委員長が、教授昇任候補として2名の助教授を推薦し、投票によって委員の意見分布を得た。

B. 水域生態研究部門（教授）及び熱帯生態研究部門（助教授）の後任人事

原田委員長より、過去3回開催された委員会の経過報告がなされ、教官公募手続きを開始するよう提案、了承された。

3. その他

専門委員会に関する申し合わせが承認された。

（文責：安部琢哉）

京大生態学研究センター
協議員会（第十五回）議事要旨

日時：1994年5月23日（月）
場所：京大会館
出席者：協議員10名、幹事1名

議事に先立ち、久馬委員の定年退官に伴う後任委員として丸山委員（農学部教授）を紹介、4月1日付人事異動に伴う後任幹事として片山総務掛長を紹介。

議 題：

1. 平成7年度概算要求について
平成7年度概算要求案を承認した。
2. 教官人事について
 - A. 温帯生態研究部門教授人事
議長より人事選考委員会から、2名の助教授が教授候補に推薦されたこと、推薦候補者の研究業績等の説明、運営委員会の意見分布の結果の報告がなされた後、投票により東助教授が温帯生態研究部門の教授として選出された。
 - B. 水域生態研究部門（教授）及び熱帯生態研究部門

（助教授）の後任人事

- 議長より人事基準委員会からの答申が説明され、討議の後、教授、助教授の公募を行うことが議決され、人事選考委員会委員が決められた。
3. 協力研究員の委嘱について
1994年度、1995年度の協力研究員の委嘱案が承認された。
 4. その他
運営委員会規定に言う専門委員会に関する申し合わせが承認された。

（文責：安部琢哉）

京都大学生態学研究センター協力研究員（Guest Scientist）リスト（訂正・追加）

センターニュースNo.22号に掲載した協力研究員の研究課題および任期に一部間違いがありましたので、正しいものを掲載いたします。また、新たに協力研究員になられた方も合わせて掲載いたします。

氏 名	所 属	研 究 課 題	任期(年度)
藤田 剛	（財）日本野鳥の会研究センター	動物の空間分布の決定機構に関する研究 / ツル類など希少鳥類の保護に関する研究	'94 ~ '95
森 誠一	名古屋大学大学院人間情報学研究科	個体間関係の形成過程、多様性および構造	'94 ~ '95
中越信和	広島大学総合科学部自然環境研究講座	人間の諸活動が温帯の植生景観に及ぼす影響	'94 ~ '95
植田睦之	（財）日本野鳥の会研究センター	猛禽類、ツル類など希少鳥類の研究 / 対捕食者戦略の研究	'94 ~ '95

1994年度(平成6年度)京都大学生態学研究センター

前期公開実習・公開セミナー募集要項

共同利用事業の一環として別紙のとおり公開実習と公開セミナーを実施し、その受講学生を募集します。

1. 実習課題
 - (1) 送粉生態学の基礎テクニック実習
 - (2) 安定同位体実習
 - (3) 国際夏期セミナー「地球環境と生態学」
2. 対象学生
 - (1) と(2)の実習は原則として学部学生(3、4年生)と大学院修士課程学生。特別な場合には大学院博士課程学生も認める。(3)のセミナーは大学院博士課程学生のみ。
3. 単位
4. 受講定員
実習・セミナー課題毎に定める。
5. 実習内容
次ページ参照。なお、日程、持ち物など詳しい実施要領は受講学生各自に伝える。
6. 受講条件
公開実習の受講学生は学生教育研究災害障害保険に必ず加入していること。

7. 必要提出書類

公開実習受講願または公開セミナー受講願（別紙様式）

8. 受講願送付先

〒520 大津市下阪本4-1-23

京大大学生態学研究センター 研究協力掛

Tel.(0775)78-0580 Fax (0775)79-8457

（封筒の表に「公開実習受講願在中」と朱書きすること。

9. 申込期限

1994年7月5日（火）必着のこと。

公開実習・公開セミナー内容

(1) 送粉生態学の基礎テクニック実習

実習の目的と内容

ブナ林とその周辺地域で、送粉生態学の観察方法、昆虫と植物の同定、冷温帯における送粉シンドロームなどについて基礎的な実習を行う。

開催地

兵庫県氷ノ山（ブナ自然林）

実習期間

7月19日（火）～22日（金）

受講定員

若干名

所要経費

氷ノ山までの交通費の他に、約2万円程度。宿舎は若桜氷ノ山ユースホステル（鳥取県八頭郡若桜つく米）
Tel. 0858-82-1700

担当教官

湯本貴和（神戸大学理学部）他

(2) 安定同位体実習

実習の目的と内容

生物起源物質の炭素、窒素安定同位体比は食性解析や生元素の循環に幅広く応用されるようになってきた。このような安定同位体比の測定には真空ライン中でガスを取り扱う技術が必要である。この実習では生物試料の炭素、窒素同位体比測定の実習と、この技術がどのような研究に応用されているのかについて簡単な講義を行なう予定である。

開催地

京大大学生態学研究センター（滋賀県大津市）

Tel.(0775)-78-0580

実習期間

随時

受講定員

若干名

所要経費

生態学研究センターまでの往復運賃と実習中の食費、

宿泊費を各自負担。

担当教官

和田英太郎（京大大学生態学研究センター）

(3) 国際夏期セミナー「地球環境と生態学」
セミナーの目的

現在の環境問題の解決には国際協力が不可欠である。特に、アジアの発展途上国の環境問題は深刻であり、環境問題に取り組む若い研究者の育成は急務である。近年、多くの国際学会が催され、国際交流も盛んであるが、将来を担う若い研究者間の草の根の国際交流は十分でない。現在大学院に学ぶ若い研究者が10年後には第一線の研究者、実務担当者になることを考えると、若い研究者間の国際交流は不可欠である。そのため、東アジアの国々の大学院生を日本に招き、日本の大学院生とともに研修を深め、将来共同して研究する礎を築くために開催する。

実施内容

講義と討論は英語で行う。

講義

General Review	Hiroya Kawanabe
Ecophysiology of Animals	Isamu Shimizu
Tropical Ecology Viewed from Mutualism	Takakazu Yumoto
Forest Dynamics	Noboru Fujita
Limnology of Biwa Lake	Yasuhiko Tezuka

研究紹介

自分の研究について30分程度、英語発表する。

開催地

京都府立ゼミナールハウス（京都府北桑田郡京北町大字下中）

Tel. 07715-4-0216

実習期間

7月13日（水）～7月20日（水）

（17日～19日：Field trip、20日：Tour in Kyoto）

受講定員

10～15名

所要経費

京都府立ゼミナールハウスまでの往復運賃とセミナー中の食費、宿泊費を各自負担。

担当教官

川那部浩哉（京大大学生態学研究センター）

手塚泰彦（京大大学生態学研究センター）

清水 勇（京大大学生態学研究センター）

湯本貴和（神戸大学理学部）

藤田 昇（京大大学生態学研究センター）

田端英雄（京大大学生態学研究センター）

センター教官の公募

当センターでは、下記の要領で教官を公募します。つきましては、貴機関の関係者に周知を賜り、適任者の応募・推薦について御高配下さるよう、お願い申し上げます。

京都大学生態学研究センター長
川那部 浩哉

- 教授公募要項 -

1. 採用人員
教授 1名
2. 対象分野
生物多様性に関連する生態学的諸問題の解明
3. 希望する内容
当センターは、1991年4月に設置された、10年時限の全国共同利用機関である。大部門的に運営されており、従って特定の部門に厳密に対応するようには考えていない。
国際生物学連合（IUBS）・環境問題科学委員会（SCOPE）・ユネスコ（UNESCO）の、生物多様性研究プロジェクト（DIVERSITAS）に、当センターが中心になって提案し、1992年に採択された「生物共生圏：生物多様性を促進する生態複合（SymBiosphere: Ecological Complexity for Promoting Biodiversity）」と、1993年に設立された「西太平洋・アジア地帯生物多様性研究国際ネットワーク（DIWPA: International Network of Diversitas Western Pacific and Asia）」と（ともに資料の必要な向きは、提出書類問合せ先に請求のことは、当センターが重要な働きを担うことを期待されているものである。従って、生物多様性に関する生態学的諸問題の解明に関して、国内外の共同研究を組織・推進するとともに、センター内でも共同して積極的に研究を進めていく人を希望する。また、当センターにおける研究・教育の推進や運営への寄与も、教授としてももちろん期待している。
水域を対象に、あるいは水域に関係して研究を進めていく人を希望しているが、それに必ずしも限るわけではない。
年令等の制限は特にない。国籍も問わないが、日本語による応答が十分に可能であることを条件とする。
応募者の従来の研究が、狭い意味での生態学に限られている必要はない。
4. 着任予定
1995年4月1日
5. 提出書類
(1) 履歴書1部
(2) 研究業績目録1部（主要著作10編以下に印を付すこと）

- (3) 主要著作（上記）の別刷等各1部
- (4) これまで行なってきた研究の概要（2000字程度）
- (5) 生態学研究センターに来られた場合の、諸種の活動に対する抱負（2000字程度。他薦の場合も、本人の書くもののほうが望ましいが、それに準ずるものを推薦者が書いたものでも可）
- (6) 推薦書1通

6. 公募締切

1994年8月1日（月）必着

7. 書類送付先

520-01 大津市下阪本4-1-23

京都大学生態学研究センター長 川那部 浩哉
封筒の表に「教授応募関係書類」と朱書き、簡易書留によって郵送のこと

- 助教授公募要項 -

1. 採用人員
助教授 1名
この人事は、1994年10月1日付で助教授に空席が生じることを前提として行なうものである。従って万一空席が生じない場合は、採用が不可能となることを了解頂きたい。
2. 対象分野
生物多様性に関連する生態学的諸問題の解明
3. 希望する内容
当センターは、1991年4月に設置された、10年時限の全国共同利用機関である。大部門的に運営されており、従って特定の部門に厳密に対応するようには考えていない。
国際生物学連合（IUBS）・環境問題科学委員会（SCOPE）・ユネスコ（UNESCO）の、生物多様性研究プロジェクト（DIVERSITAS）に、当センターが中心になって提案し、1992年に採択された「生物共生圏：生物多様性を促進する生態複合（SymBiosphere: Ecological Complexity for Promoting Biodiversity）」と、1993年に設立された「西太平洋・アジア地帯生物多様性研究国際ネットワーク（DIWPA: International Network of Diversitas Western Pacific and Asia）」と（ともに資料の必要な向きは、提出書類問合せ先に請求のことは、当センターが重要な働きを担うことを期待されているものである。従って、生物多様性に関する生態学的諸問題の解明に関して、国内外の共同研究を組織・推進するとともに、センター内でも共同して積極的に研究を進めていく人を希望する。
熱帯林域を対象に研究を進めていく人を希望しているが、特にこれには限らない。

20才代後半から30才代前半の人を希望している。国籍は問わない。

応募者の従来の研究が、狭い意味での生態学に限られている必要はない。

4. 着任予定

決定後、なるべく早い時期

5. 提出書類

- (1) 履歴書 1部
- (2) 研究業績目録 1部 (主要著作 5編以下に印を付すこと)
- (3) 主要著作 (上記) の別刷等各 1部
- (4) これまで行なってきた研究の概要 (2000字程度)
- (5) 生態学研究センターに来られた場合の諸種の活動に対する抱負 (2000字程度。他薦の場合も、本人の書くもののほうが望ましいが、それに準ずるものを推薦者が書いたものでも可)
- (6) 推薦書 1通

6. 公募締切

1994年8月1日(月) 必着

7. 書類送付先

520-01 大津市下阪本4-1-23

京大生態学研究センター長 川那部 浩哉

封筒の表に「助教応募関係書類」と朱書き、簡易書留によって郵送のこと

教授・助教授公募に関する問合せ先

(1) 研究内容等について

生態学研究センター長 川那部 浩哉

Fax 0775-78-1436

(2) 提出書類について

生態学研究センター総務掛

Tel 0775-78-0580

Fax 0775-79-8457

生態学研究センターの教官構成 (1994年5月23日現在)

安部 琢哉 (教授: 生態進化研究部門)

藤田 昇 (助手)

東 正彦 (助教授)

井上 民二 (教授: 熱帯生態研究部門)

川那部 浩哉 (教授: 寒帯生態研究部門)

甲山 隆司 (助教授)

中西 正己 (助教授)

成田 哲也 (助手)

清水 勇 (助教授)

杉本 敦子 (助手)

田端 英雄 (助教授)

手塚 泰彦 (教授: 水域生態研究部門)

1995年3月31日定年退官

和田 英太郎 (教授: 生態構造研究部門)

遊磨 正秀 (助教授)

センターを去るにあたって

院生の皆さんへ

蒔田明史 (文化庁記念物課)

皆さん、お元気でしょうか? なが〜くお世話になった京都大学を離れて東京へやって来てもう2カ月がたちました。現在は、というと、毎日ネクタイを締めて霞ヶ関の官庁街に通うという、つい数カ月前には想像もしなかった生活を送っています。天然記念物の指定・保護・管理等に関する仕事なのですが、全国に1000件近くある天然記念物を調査官4人で賅っているのですからなかなか大変です。御多分に漏れず天然記念物も人間活動との絡みで様々な問題をかかえています。そうした状況の中で、「貴重な自然とはなにか?」「人間は自然とどのように関係を作り上げていくべきか?」等を考えていきたいと思っています。生態学で得られた研究成果も行政の中にどんどん活かしていきたいと思っておりますので、御協力宜しく!(この項は全国(?)の読者の方々へ)

さて、私の現状報告だけでなく、院生諸氏にも一言。院生が教官と対等(以上?)に発言してきたことは、生態の研究室の長所だと思います。センターには優れた教官の方がたくさん居られますが、研究を行うのは院生それぞれなので、「教官に指導してもらおう」というよりは、自分のやりたいことを実現するために「如何にして上手に教官を利用するか」を考えるべきです。旺盛な批判精神をもって、自らの研究スタイルを確立していただきたいと思っております。(教官も研究者である以上、常に「発展途上」でなければならないし、そのためにも院生からの批判は重要です。)地球にとって生物の多様性が重要なのに同様に、研究室にとって研究の多様性は大切です。皆さんがそれぞれの感性で研究を進められてこそ幅の広い懐の研究室になることができます。そして、皆さんが「いかにactiveにやっているか」によって研究室の評価は決まります。頑張ってください。期待しています。

生態研センターに寄せて

Eugene Kornel Balon 教授の来日を終えて

今年3月17日から6月14日までの約3カ月間、カナダ・ゲルフ大学のバロン教授が、日本学術振興会の招へい研究者ならびに京都大学招へい外国人学者として来日され、当センターを拠点として日本の研究者と交流を深めていただきました。

バロン教授には、当センターの施設面ならびに宿舍との距離等の関係で、かなりの不便をおかけせざるを得ませんでしたが、滞在中は、コイ科魚類の進化的問題点やシーラカンス保護などの話題を中心に、各所で精力的にセミナー等を行っていただきました。

さまざまな議論の中でももっとも印象深いのは、コイあるいはニシキゴイに関する事柄でした。日本人にとってはあまりにも馴染み深い魚類ですが、その起源や系統関係について改めて問われたとき、その科学的データの乏しさに我々自身、驚かされたものです。

最後に、大阪教育大の長田芳和氏や、滋賀大の鈴木紀雄氏、精華大の柴谷篤弘氏、京大の中村泉氏、大阪市大の幸田正典氏、国立養殖研の細谷和海氏、長崎大の東幹夫氏、九州大の木村清朗氏、琵琶湖博物館開設準備室の嘉田由紀子氏ならびに当センターのスタッフも含め、多くの方々のご協力によりバロン教授の滞在を有意義なものとすることができました。皆様に改めて感謝いたします。最後になりましたが、バロン教授からのメッセージを掲載いたします。

遊磨正秀（生態学研究センター）

In several papers published in the last 10 years I documented the reasons for my departure from the western philosophy to the eastern Taoist roots, the reasons for abandoning the dialectics of conflict for the harmonious dualism of Tao. It led to much alternative interpretations of earlier and current data and to a desire to visit at least one Asian country close to the origin of this philosophy. As the editor of an international journal, I have witnessed increased submission of papers by Japanese colleagues, had several visiting scientists from Japan in my laboratory, some even for the duration of a sabbatical. It led to the translation of two of my review studies into Japanese and their publication in Japan. Although planned for many years, it was not possible to find sufficient time earlier to stay in Japan for a longer period.

It was, therefore, a great privilege to be invited by CER on JSPS Fellowship. I have spent most of the 90 days of my

sojourn in Japan at the Shugakuin International House of Kyoto University where I set up a temporary study and editorial office supported by E-mail and FAX connections to my own laptop computer. Some days were spent at the Center for Ecological Research in Otsu. Lectures or seminars on "the newest findings on the biology of the living fossil *Latimeria chalumnae*", on "biodiversity affected by waterworks and exploitation", on "reproduction and life histories of fishes", and on "the fund raising concerts of Stradivari decorated quartet for our institute" were given at CER Kyoto University, Osaka City University, National Research Institute of Aquaculture (Nansei, Mie), Osaka Kyoiku University, Fisheries Research Station of Kyoto University in Maizuru, Kyushu University, and the Lake Biwa Museum Project Office.

Our main collaborative research project "on the origin of the wild carp in Japan and nishiki goi" led to several consultations with other scientists and an extended field trip to the Niigata Prefecture. This project organized by Dr. Yuma (CER) will continue after my departure and may result in a major publication.

Finally, it was agreed and initiated that my international journal *Environmental Biology of Fishes* will publish a dedicated issue and hardcover volume on Fish Biology in Japan. One more Japanese scholar was selected to serve as Advisory Editor for the journal and two as guest editors for the above volume.

In the last 10 years I devoted much attention to science done in my field in Japan or by Japanese scientists. Very impressive progress has been made in standards of presentation, and the volume of research results published in international journals is increasing more rapidly than in any other nation. Some of the approaches by Japanese scientists are imaginative and novel more often than in American and British science constricted by hardened neodarwinian orthodoxy. Unfortunately, the majority of scientists in fish biology in Japan (and many other countries) lacks confidence in interpreting their data along other than western philosophy. Most follow the interpretations common in western science, even if these are not always correct.

Eugene Kornel Balon, Professor,
Institute of Ichthyology and
Department of Zoology,
Guelph University, CANADA

陸水生物の標本データベースの作成

さまざまな生態地域における生物の多様性やその長期変動を明らかにするために多くの生態学的研究がなされてきた。それらのデータは個々の研究者や機関に所有されているが、多くの研究者に利用できる形や状態になっていないのが実状である。地球環境問題の1つである生物多様性問題に対処していくためには、地球規模の生物圏動態の予測という包括的研究が重要であるが、そのための基礎資料として、現有するデータを共有化するためにデータベースを構築する必要がある。

そこで、生態学研究センターが旧大津臨湖実験所から引き継いで所蔵している生物標本をデータベースにすることを試みた。(京都大学学内特定研究、「生物圏多様性の長期変動に関するデータベース構築」井上民二教授代表、平成4～5年度)

当生態学研究センターが所蔵する日本及びアジアの主として陸水域で採集された生物標本(鳥類102、両生類53、魚類1029、昆虫類935、甲殻類169、貝類562、その他の無脊椎動物213点の乾燥・液浸標本)を整理し、属性データを記載したカードを作成し、コンピュータに入力してカード型データベースとした。

また、1963年以来30年にわたって名越誠さん(奈良女子大学)により採集され、当センターに保存されてきた琵琶湖の固有底生魚イサザの標本330点についても整理し、データベースとした。

これら生物標本のデータベースは資料集として出版し、内外の研究者が利用できるようにする予定である。またイサザの標本は長期の琵琶湖の水質環境変動などを分析するための試料としても利用されることを期待している。

成田哲也(生態学研究センター)



標本整理中のセンター技官・小板橋忠俊さん

TREE誌9巻79-80(3月号)にご注目を!

Lottery modelで有名なPeter Chessonらによる"The forest architecture hypothesis for diversity maintenance"というレビューが載っています。タイトルだけ見たセンターの某氏に、「お前がいつも言っているような話が書かれているではないか」と私を揶揄させたこの記事は、中身を読んでみたらすぐわかるように、同じ名前の私の仮説(J. Ecol. 81: 131-143, 1993年)の非常にポジティブかつ的確な紹介です。(ご想像のとおり、某氏に「文句は中身を読んでからにせい」と切り返したのはもちろんです。)私の論文の署名査読者の一人がChessonさんでした。彼の「共存条件をはっきり示せ」という、もっともなコメントに沿って、私としては膨大な計算(京大の大型で5万円以上)をおこなった結果みえてきた骨格を、Forest Architecture Hypothesis(森林構造仮説)として修正稿に加えた経緯があり、これは嬉しい紹介記事でした。ただし、編集のほうの誤解で(その原因も推測できますが)、このレビューの図1の縦軸は上下逆さまになっています。ご注意ください。

甲山隆司(生態学研究センター)

生態研セミナーの報告

1993年度から現在までの生態研セミナー（No. 26-40、予定分を含む）を報告します。1994年度からは、大学院生向け全体セミナーと生態研セミナーを合体させ、センター内部からの情報発信機能を強化する方針に変更しました。また、ついに大津の講義室を研究室に変換せざるを得なくなり、No. 33からは京都キャンパス（おもに楽友会館）での開催となっています。

- 26 S. I. Dodson (University of Wisconsin, Madison) : On the chemical communication of animal plankton (93/4/19)
- 27 井上民二 (京都大学生態学研究センター) : サラワク林冠生物学計画のめざすところ (93/5/21)
- 28 (1) H. W. Hethcote (University of Iowa) : Modeling infectious disease dynamics (2) 小池孝良 (森林総合研究所・北海道支所) : 北方林構成樹種の成長に及ぼす温暖化環境の影響の予想 - 生理生態的アプローチ - (93/6/4)
- 29 四方哲也 (大阪大学工学部) : 突然変異体の競争の共存 (93/10/22)
- 30 D.W. Wilson (University of Wisconsin, Madison) : Single populations as ecologically differentiated units, with examples from freshwater fish (94/1/6)
- 31 京都大学生態学研究センター 1993年度修士論文発表会 阿部友幸 - ブナ林の低木オオカメノキ (*Viburnum furcatum*) の発育段階とモジュール構造; 大野泰史 - 定着にかかわる侵入種の資源利用の特徴; 金子修治 - カイガラムシを寄主とする寄生蜂の資源利用; 田中一新 - *Quercus glauca* の葉上寄生菌 *Cystotheca wrightii*, *Erysiphe heraclei* の二次林内分布; 陀安一郎 - A study of nitrogen fixation by symbiotic bacteria in the gut of termites using the stable isotope techniques; 中川毅 - Palynological studies on the Quaternary sediments in Kathmandu Valley, central Nepal; 西脇妙子 - 培養条件下における哺乳類のサーカディアンリズムの研究; 百瀬邦泰 - 混合フタバガキ林の植物の繁殖様式とその過程における動植物相互作用; 山口建一郎 - Theoretical analysis of plant contamination by organic substance with respect to temperature (94/1/28)
- 32 中野伸一 (京都大学生態学研究センター) : 従属栄養鞭毛虫による溶存態リン排出とその琵琶湖生態系における重要性 (94/3/22)
- 33 Elgene O. Box (University of Georgia, 東京大学客員教授) : A new climate-based global model for phenophysiological potential natural vegetation (94/4/1)
- 34 E. K. Balon (Guelph University) Two examples of effects on biodiversity - cross European canal and sea cucumber exploitation (94/4/22)
- 35 甲山隆司 (京都大学生態学研究センター) : 植物のサイズ分布モデルの視野: 個体機能から植生帯動態の予測まで (94/5/13)
- 36 村上哲明 (東京大学理学部) : ホウビシダ類 (チャセンシダ科) の分子分類と進化 (94/5/27)
- 37 大沢直哉 (京都大学生態学研究センター) : ナミテントウ野外個体群の生態学的研究 (94/6/3)
- 38 東正彦 (京都大学生態学研究センター) : 生態系の自己組織化プロセスについて (94/6/17)
- 39 Peter J. Bellingham (京都大学生態学研究センター) : Simulating the responses of Jamaican montane forests to hurricanes (94/7/8)
- 40 紀本岳志 (紀本電子)・中西正己 (京都大学生態学研究センター)・熊谷道夫 (滋賀県琵琶湖研究所) : 琵琶湖における生物・化学・物理相互作用 - B I T E X 観測から - (94/7/22)

生態学研究センターの共同研究一覧

1993年度及び1994年度すでに実施が決定している文部省科学研究費などによるセンタースタッフが関係した共同研究をまとめました。研究者は代表者を筆頭とし、センタースタッフは斜体文字で示し、センタースタッフ以外の分担研究者については省略してあります。

川那部・安部・井上・東ほか

「地球共生系：生物の多種共存を促進する相互作用機構」(総括班)

1991-94 文部省科学研究費重点領域研究

西平守孝(東北大・理)・川那部・井上・東ほか

「生物群集における種間関係の可塑性と多種共存機構」(「地球共生系」A03班)

1991-94 文部省科学研究費重点領域研究

柳沢康信(愛媛大・理)・川那部ほか

「アフリカタンガニイカ湖の魚類を中心とする生物群集の多様性に関する研究」

1992-94 文部省科学研究費国際学術研究

川那部・遊磨・中西・成田ほか

「タンガニイカ湖・琵琶湖両生態系の多様性・弾力性と環境変動」

1992-94 文部省科学研究費国際学術研究

川那部・和田・安部・井上・中西・甲山・遊磨・東ほか

「生物多様性維持・利用のための保全地域理論の探求」

1993-95 文部省科学研究費総合研究(A)

川那部・手塚・中西・安部・遊磨・成田・和田・杉本・田端・甲山・藤田ほか

「水体における物質循環と気候」

1992-96 文部省国際共同研究等経費(IGBP経費)

広瀬忠樹(東北大・理)・川那部・和田・甲山ほか

「地球環境変化とモンスーンアジア陸域生態系研究の推進および国際対応」

1993 文部省科学研究費総合研究(A)

高井康雄(東京農大・総研)・和田・杉本・井上ほか

「東南アジアにおける熱帯林の破壊と生態系の変貌過程」

1990-94 文部省科学研究費創成的基礎研究

沼知健一(東大・海洋研)・和田ほか

「バイカル湖における動物群集と進化系統学・環境変動の研究」

1992-93 文部省科学研究費国際学術研究

奥田節夫(岡山理科大・理)・和田ほか

「世界最大の淡水湖(バイカル湖)における環境-物質循環-生態系の相互作用に関する研究」

1992-94 文部省科学研究費国際共同研究

岩田勝哉(和歌山大・教育)・和田ほか

「中国総合養魚に関する生態・生理学的研究」

1991-93 文部省科学研究費国際学術研究

和田・安部・中西・清水・成田ほか

「安定同位体による生物圏の化学構造の解明」

1993-95 文部省科学研究費一般研究(A)

和田・中西・杉本ほか

「 ^{13}C ・ ^{15}N トレーサーの高精度・迅速・微量分析システムの確立」

1992-93 文部省科学研究費試験研究(B)

高井康雄(東京農大・農)・和田・杉本ほか

「アジア地域の熱帯林生態系の変貌課程と温室ガスの動態」

1990-94 文部省創成的基礎研究(新プロ)

安部・東ほか

「バイオリサイクル-その基本的機構とバリエーション」

1992-1994 文部省科学研究費総合研究(A)

安部・東ほか

「シロアリ-共生者システム：熱帯陸上生物群集における作用機構」

1993-1994 文部省科学研究費国際学術研究

藤井宏一(筑波大・生物科学)・安部ほか

「種間間接作用機構の操作実験による解析」(「地球共生系」A02班)

1991-94 文部省科学研究費重点領域研究

安部・中西・遊磨・成田ほか

「琵琶湖沿岸帯のエコトーン生物群集における生物間相互作用」

1993 文部省科学研究費一般研究(C)

井上・甲山ほか

「サラワクのフタバガキ林における植物の繁殖システムと動物の季節動態」

1992-93 文部省科学研究費国際学術研究

井上・川那部・田端・甲山・遊磨・成田ほか

「生物圏多様性の長期変動に関するデータベースの構築」

1992-1993 京都大学学内特定研究

長田芳和(大教大・生物)・遊磨ほか

「琵琶湖産魚類の分布調査」

1991-93 琵琶湖博物館開設準備室委託調査

紀平肇(大阪清風高校)・遊磨ほか

「琵琶湖産貝類についての資料調査」

1991-93 琵琶湖博物館開設準備室委託調査

遊磨ほか

「住民参加による水辺の遊び再発見」

1992-94 琵琶湖博物館開設準備室委託調査

遊磨ほか

「多自然型河川を回復・保全するための生態学的研究」

1993-94 河川整備管理財団助成研究

高谷好一(京大・東南ア研)・遊磨ほか

「住民参加型手法によるホタル調査と水環境問題」

1993-94 日本自然保護協会助成研究

中西ほか

「水生生物生態追跡手法の開発」

1991-93 科学技術庁委託調査研究

中西ほか

「富栄養化湖沼における微小生物の相互作用」

1992-93 環境庁委託研究

伊東俊太郎(日文研)・田端ほか

「地球環境の変動と文明の盛衰」

1992-1993 文部省科学研究費重点領域研究

田端・藤田ほか

「南山城の更新統の丘陵上に発達する里山の総合的研究」

1992-1993 日本生命財団助成研究

鈴木英治(鹿児島大・教養)・甲山ほか

「さまざまな管理段階にある熱帯フタバガキ多雨林の構造と更新動態」

1991-93 文部省科学研究費国際学術研究

山本進一(岡山大・農)・甲山ほか

「森林群集の更新動態と種多様性維持機構」

1992-1994 文部省科学研究費総合研究(A)

大沢雅彦(千葉大・理)・甲山ほか

「屋久島原生自然環境保全地域調査」

1992-1993 環境庁自然保護局委託調査

甲山ほか

「内部構造をもつ生物集団のダイナミクスと群集形成」

1993-1994 文部省科学研究費一般研究(B)

甲山・Bellingham

「山地熱帯多雨林と暖温帯多雨林における自然攪乱の比較研究」

1993 文部省科学研究費特別研究員奨励費

成田ほか

「琵琶湖とその集水域における底生動物の基礎的調査」

1992-1994 琵琶湖博物館開設準備室委託調査

1993年度センタースタッフの行なった講演活動一覧

1993年度センターのスタッフが行なった講演の一部のリストです。これ以外にも多数の講演が行なわれました。

安部琢哉(1993/4/2) タイ南部の森林及びゴム園におけるシロアリの分布。日本生態学会大40回大会, 松江。

Abe, T. and Wada, T. (1993/12/2) Termite-symbionts system: its nitrogen economy and impact on tropical terrestrial ecosystems. International Symposium on "Ecological Perspective of Biodiversity", Kyoto.

藤田 昇(1993/4/4) ブナ林常緑性低木の葉のサイズと寿命。第40回日本生態学会大会, 松江。

Higahsi, M. and Yamamura, N. (1993/8/29) Coevolutionary process of plant communities with their decomposer and grazer communities. S2-5-5 in XV International Botanical Congress, Yokohama.

甲山隆司(1993/4/3) 森林構造のダイナミクス。第40回日本生態学会大会, シンポジウム「地球環境変動とモンスーンアジアの陸上生態系」, 松江。

甲山隆司・野間直彦・鈴木英治(1993/6/) 西カリマンタン・ランダック川流域の焼き畑再生林の発達。日本熱帯生態学会第3回年次大会, 鹿児島。

Kohyama, T. (1993/9/1) The role of forest architecture in the coexistence of tree species. S2.2.6 in XV International Botanical Congress, Yokohama.

Kohyama, T. (1993/9/5) Modelling dynamics of forest structure. IGBP International Symposium "Global Change Impacts on Terrestrial Ecosystems in Monsoon Asia", Tokyo.

Kohyama, T. (1993/12/5) The role of architecture in plant

community organization. International Symposium "Ecological Perspective of Biodiversity", Kyoto.

甲山隆司・P.J. Grubb (1994/3/29) 照葉樹林構成種の実生の地下部アロメトリー。第41回日本生態学会大会, 福岡。

Nakanishi, M. (1993/10/16) Influence of exploitation of littoral zone on bio-communities in Lake Biwa. International Symposium on Ecosystem and Environmental Problems, Kyungpook National University, Kyungpook.

中西正己ほか(1993/11/7) 琵琶湖における浮遊生物植物動態の解析。V. 植物プランクトンの基礎生産。日本陸水学会第58回大会, 松江。

占部城太郎・川幡佳一・中西正己(1992/11/7) 琵琶湖における浮遊生物植物動態の解析。VI. 物質循環における甲殻類プランクトンの役割。日本陸水学会第58回大会, 松江。

中西正己ほか(1993/11/7) 琵琶湖における浮遊生物植物動態の解析。VII. まとめと今後の課題。日本陸水学会第58回大会, 松江。

成田哲也(93/11/7) 水生ミミズRhyacodrilus hiemalisの繁殖時期と卵数。日本陸水学会第58回大会, 松江。

清水勇(1993/2/12) 昆虫における光周期の受容機構。岡崎基礎生物学研究所シンポジウム「生物リズムの分子機構」, 岡崎。

杉本敦子(1993/9/30) 泥炭地におけるメタンの安定同位体比と生成放出機構。1993年度日本地球化学会年会, 東京。

田端英雄(1993/7/15) 今なぜ里山なのか - 里山との新しい関係を求めて - 。第9回自然環境復元シンポジウム, 新潟。

- 田端英雄 (1993/9/4) 里山と種の保存法．南山城のオオタカを守る会報告会，京都．
- 田端英雄 (1994/3/13) 鹿背山の里山．鹿背山の文化・自然を守る会、里山研究会共催「里山ミニシンポ」，京都．
- Tezuka, Y. (1993/7/24) Limnology of Lake Biwa. International Summer Seminar, Kibougaoka, Shiga Pref.
- 手塚泰彦 (1993/8/20) 水の華：琵琶湖のアナベナ・ブルームについて．琵琶湖国際共同観測 (BITEX '93) 協賛公開シンポジウム，大津．
- 和田英太郎 (1993/3) 現在の地球大気の組成を決めた要因としての生物活動：生物圏から大気圏への化学物質の移動．東京．
- Wada, E. (1993/3) Possible impacts of acid rain on aquatic ecosystems from isotopic viewpoints, Symposium on "Development and Application of Biogeochemical Methods in Acid Rain Research", Tsukuba.
- 和田英太郎 (1993/4) 海洋性藻類の炭素・窒素安定同位体組成の変動．日本植物学会近畿支部会，京都．
- 市川忠史・吉田勝彦・和田英太郎 (1993/4) 深海性ソコダラ (600m) の食物源．日本生態学会，島根．
- 和田英太郎 (1993/5) 安定同位体比から見た水界生態系における窒素固定．シンポジウム「水素生産と窒素固定」．マリンバイオテクノロジー研究発表会，東京．
- 半場祐子・和田英太郎 (1993/7) 大気CO₂の変化と植物の炭素同位体比．理工学における同位元素研究会，東京．
- Jedrysek, M. O.; Sokolowski, K.; Halas, S. T.; Radwan, S.; Wada, E. and Takai, Y. (1993/9) Stable isotope characteristics of seasonal and spatial variations of methanogenesis in freshwater sediments. Biogeomon and workshop on Integrated Monitoring. (Czech Geological Survey, Prague.)
- 山田佳裕・和田英太郎 (1993/11) 天然同位体比から見た琵琶湖生態系の構造．松江．
- 和田英太郎・吉井浩一・河合崇欣・上田真吾・Timoshkin, O. A.・Melnik, N. G.・Gorbunova, L. (1993/11) バイカル湖における栄養塩，プランクトン，安定同位体比の予備調査．松江．
- 和田英太郎 (1993/11) 生物界における安定同位体比のゆらぎ．日本化学会近畿支部講演会，大津．
- 遊磨正秀 (1993/4/3) タンガニイカ湖岩場における魚類の場所利用．第40回日本生態学会，松江．
- 遊磨正秀 (1993/6/12) 各地のカワニナより - 形態比較．全国ホタル研究会第26会大会，沼津．
- 遊磨正秀 (1993/7/10) うるおいのなる豊かな人里環境とは．日本ホタルの会第2回シンポジウム，東京．
- 遊磨正秀 (1993/7/14) ホタルと人と環境．環境教育講演会，滋賀県竜王町．
- 遊磨正秀 (1993/7/24) ホタルは何を思っているのか．朝日エコひいき講座，大阪．
- 遊磨正秀 (1993/8/28) かいどり大作戦．環境文化セミナー (平成5年度第2回)，滋賀県蒲生町．
- 遊磨正秀 (1993/9/6) 自然とひと 共生へのライフスタイル．滋賀県淡海文化交流会 (第1回)，大津．
- 遊磨正秀 (1993/10/3) 身近な自然．大津市身近な環境調査講演会，大津．
- 遊磨正秀 (1993/10/16) 人の生活、ホタルの生活．自然環境とホタルの講演会，兵庫県篠山町．
- 遊磨正秀 (1993/10/31) こどもの目から見た環境づくり．近江八幡市平成5年度「身近な環境づくり推進事業」講演会，近江八幡．
- 遊磨正秀 (1993/11/4) ホタルと人と水の理想的な関係について．蛍等水生生物講演会 (大阪市下水道技術協会)，大阪．
- 遊磨正秀 (1993/12/17) 生き物と人の水辺．「自然環境創造の為に水辺の生態系保全技術」講習会，東京．

編集後記

- ・ 8月のINTECOLの準備にお忙しい方が多いことと思います。
- ・ 4年目に突入したセンターは建物移転と教授・助教授人事で新たな弾みがつきそうです。
- ・ センターでは皆様からの記事やご意見をお待ちしております。

(M. Y.)

京都大学

生態学研究センター・ニュースの問い合わせ先

京都大学生態学研究センター・ニュース編集係

今後のスケジュール

センターの行事および委員会

1994年

7月13～20日 国際夏期セミナー
「地球環境と生態学」
7月19～22日 公開実習
「送粉生態学の基礎テクニック」
8月1日 教官公募締切
8月中旬 センターニュースNo. 24

10月中旬 センターニュースNo. 25

12月中旬 センターニュースNo. 26

1995年

1月9～13日 集中講義&セミナー
「生態学における理論 - 実証のインターフェイス」
2月中旬 センターニュースNo. 27

センターあるいはIGBP・ DIVERSITAS関連の研究会

8月 IGBP-GCTE International Symposium
(Basel, Switzerland)
8月下旬 冬眠する哺乳類の生態学的機能と
生理的機構の統一的理解(公募研究会)
9月5～9日 International Forum Biodiversity:
Science and Development Towards a New
Partnership (Paris, France)
10月中旬 微生物生態学への分子生物学的ア
プローチ(公募研究会)
10月23～25日 International Symposium on
Microbial Biodiversity (東京)
11月初旬 生物多様性・物質循環・環境変遷
を考える - パイカル湖での融合をめざして
(公募研究会)
11月18～19日 河川の微地形と生物群集の動
的關係に関する研究会(公募研究会)
11月中旬 林床から森林動態を考える(2)
- ササの生活史をいかに解明すべきか
(公募研究会)
11月下旬 極東寒帯生態系研究の展望
(公募研究会)
11月23～25日 Workshop on Boreal Ecosystem
(京大会館)
12月9～11日 第6回京都国際セミナー「生態学か
ら見た安定社会」(京都府立ゼミナール内)
12月初旬 日本産野生植物の繁殖様式に関す
る基礎的研究・性型システムの進化
(公募研究会)

3月中旬 森林群集の更新動態 - 研究の現状
と将来展望(公募研究会)

関連分野の研究会・シンポジウム

6月18～23日 International Symposium on
Charrs and Brown-trout (Trondheim, Norway)
6月24～26日 日本熱帯生態学会大会(筑波)
7月4～8日 熱帯陸水学国際シンポジウム
(Salatiga, Indonesia)
7月14～19日 第6回国際塩湖シンポジウム
(Beijing, China)
8月15～18日 International Symposium on
Community Ecology and Conservation Biology
(Bern, Switzerland)
8月21～26日 International Congress of
Ecology: INTECOL (Manchester, UK)
8月29日～9月2日 European Congress of
Entomology (York, UK)
9月12～16日 Symposium on Aquatic Weeds
(Dublin, Ireland)
9月20～22日 日本植物学会大会(札幌)
9月20～22日 日本陸水学会大会(八王子)
9月26日～10月2日 Meeting of European
Society of Ichthyology (Oviedo, Spain)
10月1～3日 第7回河川・湖沼国際
シンポジウム(松本)
10月5～8日 日本動物学会大会(名古屋)
11月5～10日 BITEX(琵琶湖国際共同観測)
シンポジウム(大津/長浜)
11月10～13日 Symposium on Forest Canopies
(Florida, USA)
7月23～29日 XXVI Congress of the
International Association of Theoretical and
Applied Limnology: SIL (São Paulo, Brazil)